第四十六期を終えて

先期四十六期、九月決算は、おかげさまで十年ぶりの三十億円の大台を突破し、三十二億一千万円の売上となりました。

過去を振り返ると、十一年前の三十五期に三十一億円の最高値を記録して以降、毎年減収を続け、五年前の四十一期には二十五億六千万円まで落ち込みました。そして、今再び、五年間でのV字回復が図られたと言えます。

しかし、その売上の内容を見ると、大きく様変わりしております。指定管理の売上が五億はあるので、この五年間のプラス分はほぼ指定管理者の売上であると考えられます。旧来型のビルメンテナンス、つまり、清掃、設備管理、警備は依然として長期下降傾向にある事は否定できません。私達の業も変わりつつあるようです。

変革期のビルメンテナンス

かつて江戸時代、当社は廻船問屋でした。それから船具商になり、船具の中の船舶塗料から塗料商になり、塗料の中のワックスを販売する中から清掃業を始め、ビルメンテナンス業に生まれ変わってまいりました。

今、これらの時と同様の変革期にあるのだと思います。会社として、組織として存続し続ける為には常に変革の波に乗り、自らを変えていかなければなりません。

周囲を見渡せば、同業者の中で売上を伸ばしている会社は十社に一社も無いのが現状です。業そのものが下降傾向にあるともいえます。今売上を維持している会社は、指定管理や介護、人材派遣など他の業務で伸びているようです。ビルメンテナンスという仕事が変わりつつあるのです。

管理という言葉は、英語ではマネージメントからアドミニストレーション、コントロール、メンテナンスまですべて管理ですが、マネージメントの意味での管理会社になる必要があるようにも思います。

そのためには、私達には今まで以上の知識や能力が求められてくると思います。

新しい時代

ちょっと大きすぎる話をしますと、歴史を振り返ると、力が物をいった文字通りの実力主義の時代から、生まれや氏素性が物をいった封建時代を経て、お金が全ての基準の資本主義の時代になりました。これが近代です。

しかし今、お金にどれほどの力があるでしょうか。金余りの時代、良いアイデアには自然と金が集まるようになりました。金がいらないわけではないのですが、最初から金持ちでなければ、何も出来ないという時代でもないのです。現代の起業家の多くはそういった人たちです。

今、情報化時代という新しい時代に入っていると思います。つまり、情報こそが力であるという時代が現代なのです。

代表取締役社長

鈴木英介



さらに、もうひとつの特徴は、現代は組織社会だという事です。ここ半世紀ばかりの、世界経済の急拡大は、新技術ももちろんですが、それを使いこなす組織によってもたらされてきました。また、新発明、新技術も、かつてのような個人の才能だけによるのではなく、大勢の研究開発組織によって担われております。それによって開発は劇的なスピードアップが図られました。「組織内分業」「組織間分業」この事で社会の生産性は飛躍的に拡大したのです。

このような組織における分業を担う為にも「情報」が不可欠なものになりました。「情報」が無ければ「分業」は出来ません。組織は「分業と情報」によって成り立っているのです。

転換期に生きる

情報化、組織化が現代のキーワードです。この新しい時代がいつから始まったのかと申しますと、十年前か、せいぜい二十年前だと思います。この位の時間は歴史的には「今日」と言っても良いのではないでしょうか。もちろん世界的に見れば、発展途上国でようやく新しい時代の入り口に差し掛かった国や、まだまだ入り口も見えてこない国もあります。

しかし、いずれにせよ、我々は歴史の大きな変り目に生きているのだと思います。現代において、明治維新の時代や、戦国乱世の時代の人たちの事を考えると、大変な時代に生きていたのだなあと思えます。こういった時代にはやはり「ロマン」があります。私は司馬遼太郎の歴史小説が好きですが、戦国時代や明治維新の時のテーマが多いようです。

未来、皆さんのお孫さんや曾孫さんがこの西暦二千年初めの時代を見た時にやはり同じような感慨を持つのではないでしょうか。

しかし、その時代の渦中にいる人から見れば、「何がロマンの時代だ。世知辛いばかりではないか。司馬遼太郎が書くようなテーマはどこにも無いぞ」と言われるかもしれません。しかし、変革期、移行期というものは、その渦中にいる者にとっては常にそのようなものだったと思います。

戦国期や維新の時代、そこに居る人は誰も「ロマン」だなどと思わなかったでしょう。「とんでもない末世、乱世」としか感じられなかったと思います。毎日が殺し合い、裏切り合い、無秩序な破壊の社会、誰もがその日を生きるので精一杯で、小説や物語など書きませんでした。それらが書かれたのは、その余韻さえなくなったずうっと後のことです。

このような新しい社会、時代に私達は生きていかなければなりません。会社もその中で発展していかなければなりません。我社が二百五十年、この新潟の地で事業を継続してこられたのは、常に過去を捨て、新しい時代をつかんできたからです。私達にとって選択肢は常に「変化」でなければなりません。

時代が急激に変化している以上、それに呑まれない為に、我々も変化し続けていかなければなりません。私も皆さんとともに新しい時代をつかんでいきたいと考えております。